

株式会社ノイエ、時頃は8時半。オフィスに出勤したフレッドは、デスクから一步も動かず書類や電話と格闘している課長の姿を見た。

「か、課長…」

徹夜明けらしい…。一心不乱に仕事を片付けて行く課長の姿に、フレッドは戦慄を覚えた。やがて一区切り着いて、課長は両手を机についた。

「お茶です。課長」

同僚のナイアがさかさずティーカップを運んで来る。課長は視線を下げたまま、手を上げて彼女に応えた。

フレッドは課長に話しかけようとした。そこでフレッドは課長のつぶやくような声を聞く。

「なお憂きことの積もれかし、なお憂きことの積もれかし」

「横光利一ですか」

「…あ？ 知ってるのか」

課長はそこでようやくフレッドに気付いたらしかった。

「たしか作品は、『春は馬車に乗って』」

「そう、病気の妻を持った主人公が、最初はうつとおしく思っていた妻の看病を、やがてそれに疲れて打ちのめされそうになりながらも、看病を通じて、妻を愛しくなっていく話さ…お前、よく知ってるじゃねえか」

「本とは家内よりも親しいくらいですから」

課長はにやりと笑った。

「このセリフは、すべての困難を受け入れてなお生きようという人の極限状態での前向きな思いが込められている」

「…課長、極限なんですね…」

「極限状態でこそ見えるものがある。この小説の主人公の場合は心がすれ違つてばかりだった妻と通じ合えたことだ」

「冒頭で、2人が同じ庭を見ているのに、主人公は亀を見て、妻は松を見ているシーンがあるんですね。最初はそれくらい二人の心は違う方向を向いていた。主人公はこの妻の事を『檻の中の獣』とまで言ったこともある」

「主人公の男にとつては嫉妬深い妻だったから、見捨てるという考えもあつたかもしれない。だが、妻の看病に疲労していく半面、看病は男にとつての幸福となっていく。彼女に尽くして行く中で男は変わったんだ。この小説の表現を借りるなら、檻の外にいた人間が、檻の中に入ったから、檻の中にいた獣の気持ちが変わつた、つてとこだな」

「二人はお互いに与えるものを与え合う。看病してるのは男なんだけど、男自身も妻から何かを得ていたんですね。互いに与えられるものを全て与えた二人は、妻の死を受け入れる」

「そして、最後に同じ花を見てきれいって言うんだ、この2人は。冒頭で亀と松を見ていたシーンとつまり対比されているよな…男が妻の看病という、困難な現実から逃げずに向き合つたからこそ、二人の心は通じ合えたんだ。俺もあらゆる困難を受け入れて生きようと思つてる」

「課長…朝焼けって綺麗ですよ」

「ああ…何度オフィスの窓から眺めたか知らないがな」

「…」

「…」

「…お前と心が通じ合つても仕方ねえだろ！」

フレッドは笑いながら、これまた笑顔の課長に頭を下げた